焦土に残る怪

田中貢太郎

青空文庫

昭和九年三月二十一日の函館の大火は、その日の午後六時から翌朝の七時まで燃えつづけて、焼失家屋二万四千戸、死傷者三千人を出したが、その時火に追われた市民は、猛火の中をくぐって安全な場所から場所へと逃げ廻った。しかし、風速三十メートルの烈風に煽られた猛火の中では、どうすることもできなかった。

山から海へ、避難民は続々としておしかけたが、そこでもまた猛火に包まれて焼死する者、或は海に入って溺死する者など、その惨状は全く眼のあてられないものがあった。

そのうちでも最も烈しかったのは、函館市の東南になった大森浜であった。従ってここには、多くの哀話とともに鬼魅悪い話が残っている。

深夜の海岸には、どこからともなくむせぶような、泣くような声が聞えて来る。青い鬼火が、そこにもここにもふわふわと浮んで、それが烈しい勢で町の方に飛んだり、焼け残った樹木の枝や電柱にあたってばらばらとくだけた。

警官の一人が巡廻していると、眼の前へ髪をふり乱した女が出て来たが、その女は生れてまもない嬰児を負い、両手に幼い小供の手を曳いていた。女は蒼白い顔を星の光にちらつかせながら、小供の手をぐいぐいと曳いた。

「おう、あついか、あついか」

女の足は早くなった。

「もうすこしじゃ、あついか、もうすこしじゃ」
その時背の嬰児がひいひいと云うようにないた。
「おう、おう、おう」
女は狂人のようになっていた。
「あついか、おう、あついか、もうすこしの、しんぼうじゃ」
女はそのまま海の方へ往ったが、みるみるその姿は海の中へ消えて往った。

これもやはり函館の大火が生んだ怪談である。某運転手が自動車をあやつって深夜の海岸を走っていた。そこは根崎海岸のドライブ道で、道幅もかなり広いし、それに障碍物がないので、運転手はいい気もちになってスピードを出していた。
と、その車の前にふらふらと飛びだして来たものがあった。運転手ははっとして、機械的にブレーキをかけた。車はその怪しい物の数間てまえでやっと停った。そこにはヘッドライトの燈に照らされて角巻をした壮い女がいた。女は何者かに追われてでもいるように非常にあわてていた。
「助けてッ」
女は蒼白い顔に髪をふり乱していた。
「助けてッ」

女の声がまた聞えた。それを見ると運転手は捨てておけないのでいきなり扉(ドア)を開けた。

「どうした、どうした」

運転手はそのまま女の傍へ往った。運転手は女を車へ乗せて女を追っている悪漢(わるもの)の手から救おうとした。運転手は怒鳴(どな)った。

「さあ、車だ」

それとともに女をつかまえようとすると、女の姿は煙のように海のほうへ消えて往った。

青空文庫情報

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「日本怪談全集」改造社
　　1934（昭和9）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

焦土に残る怪

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/